

教え合うことから生まれる、 新しい知恵を楽しもう

祖父に金田一京助氏、父に金田一春彦氏を持つ3代目・金田一秀穂さんは、「国語の権威がいると、みんなが都合いいでしょう」と満面の笑みで迎えてくれました。正しい言葉を使うことよりも、一番大切なのは、他人と付き合う時に心地よいこと。対話を重ね、刺激のある暮らしに役立つ言葉の力を伺いました。

**人間は、頭を使いたいと思って
生まれた!?**

日本語を教えるようになり30年、来年には65歳となり定年です。

先日、新聞社の企画で、「先生も、そろそろ夕方ですね。『人生の夕方』というテーマで執筆をお願いします」と言われました。そうか、もう人生の夕方かあと、考えさせられた出来事です。

29年前、杏林大学に外国語学部が新設され、教員の道に誘われました。その後、学生に「どう気づかせるか?」どのようにやる気にさせるか?」を目標に

してきました。どうすれば、勉強や研究が、楽しいという刺激になるのか。ずっと考えてきました。

そもそも、人間の頭(脳)は、同じ哺乳類と比べて、やたらと大きい。意味なく大きい訳はない。そう考えると、人間は自分の頭を使いたいと思って生まれてきている。そんな、気がします。

教師が、「楽しいだろう、楽しいぞ」と言うだけでは、刺激になりません。教師自身が羽目を外して楽しみ、バカになるぐらいおもしろがついていると、学生にも刺激が伝わり、「ちよつと、おもしろいかもしれない」と、思ってくれるかもしれ



ません。それが、大事なのです。

余談ですが、外国で日本語を教えている卒業生が集まった時のことです。外国のみやげの一つにビニールチューブに詰まったドリアンの羊羹のようなものがありました。ドリアンです。みなさんも想像がつくように、匂いも独特です。匂いを嗅いだ人は動きが止まり、口にした人はうがいですと大騒ぎになりました。

しかし一人だけ、「あたし、これ好きかも」と言いました。「好き」とか「嫌い」は、自分で決められます。一方、学生が、おもしろいと思うかどうかは、私には決められません。だから、かもしれない発想でこつこつ研究を重ね大きな功績を残しました。私ほという、自由に受け入れる能力が二人よりも得意だったので、様々な常識に対して、広い視野を持つことができました。

アメリカで「洗濯をする」という言葉を教えました。文章例で、「天気の良い日には洗濯をします」と教えたのですが、アメリカ人の生徒が、「先生、間違っています。洗濯は天気の良い日にするんです」と反論してきました。「おいおい、洗濯は天気の良い日にするに決まっているだろう」となるのですが、彼が言うには、「晴れた日は遊びに行くから洗濯をしない。雨の日は出かけないから洗濯をする」と。確かに、よく見ると晴れている日に洗濯物を見ないわけですよ。

**のんびり暮らしを楽しみ、
金田一流を突き進む**

昔の寺子屋をやることに興味を持っています。定期的に集まり、いろんなテーマの話をする。それも私が取り組む言語学、言葉学と言えでしょう。言葉は、みんながいつも考えています。言葉って広いですよ。コミュニケーションの道具だけではなく、考えたり、感じたり、

い、となるのです。

**対話が弾むと、
新しい知恵が生まれる**

「好きかも」という新しい言い方は、若者の会話でよく聞きます。それは、「好き」「嫌い」に分けられる簡単な〇×式の答えに当てはまらない気持ちであり、アナログでいることを保持したい人間らしい欲求だと思っています。

最近の学生は、素直でいい子です。でも、自分で考えようとしませんし、闘いも挑みません。「そうじゃないんじゃない」と助言すると、ダメ出しされたと思いきや萎縮してしまいます。〇か×に判断されることに臆病なのでしょうね。

自分の考えを持ち、すり合わせ議論を交わすことが、学問だと思います。古代ギリシャの哲学者ソクラテスが用いた対話法(問答法)による教育の真価は、定年を目の前にして、ようやくわかります。違う考えを持った二人が対話することで、新しい知恵が生まれます。その知恵を楽しみ対話が弾めば、さらに新しい知恵が生まれます。

**相手を尊重し、
理解するからおもしろい**

金田一家3代は、それぞれに自由で、好奇心が旺盛です。祖父と父は、自由思ったり、すべて言葉を使います。大事なのは、コミュニケーションするまでの過程です。人工知能が発達して、何でもかんとんにできる時代になりますが、人工知能ではコントロールできない部分が残ります。それを考えたり、思いついたりする時に言葉が不可欠です。例えば、ばかばかしいことをする人の心は、人工知能には理解できないでしょう。それこそ、人間の領域、人間らしさが潜在、おもしろいと思います。

定年後は、考えることをやる時間を大切にしたいと思っています。朝風呂に入る、二度寝する、散歩する。普段の暮らしを楽しむ時間をもちたいですね。でも、楽しい刺激を求めて、話すことも考えることもやめられないでしょうね。

Kindaichi Hideho

1953年、東京都生まれ。杏林大学外国語学部教授。上智大学文学部心理学科卒業、東京外国語大学大学院博士課程修了。中国大連外国語学院、コロンビア大学などの講師を経てハーバード大学客員研究員などを歴任。著書に『金田一家、日本語百年のひみつ』『適当な日本語』『「汚い」日本語講座』など。

言語学者・杏林大学外国語学部教授 金田一秀穂さん

